

## 特集にあたって

関 根 正 美

コロナ禍による1年の延期を経て、2020年東京大会は挙行された。2013年9月の招致決定以降、そして遡れば2016年大会招致から15年以上もの間、日本（東京）はオリンピック（・パラリンピック）を傍らにして時が流れてきた。

開催前から様々な問題が噴出し、そしてコロナ禍による延期はオリンピックそのものの開催意義がなにかを、核心つく形で問われ続けた。大会の総括や検証は今後、中長期的な視野や多角的な視野の下で検討が行われなければならないが、現時点から見える2020年東京大会の姿を論じることは、あの大会が今後どのような姿形のレガシーとしてあり続けるのか、またその評価が変化するかを見定める上での参照点として重要であるといえよう。

評価は評価主体の価値意識によって変わる。評価は場合によってはイデオロギーにとって変わることもある。そしてまた、時間の経過とともに変わることもある。1964年大会も研究が進む中で冷静な評価が出現している。2020東京大会の評価も、これから多様な形で出てくるであろう。今号の本誌の特集は、大会のレガシーに厳しい目が向けられている状況の中で何らかの主張を展開するのではない。そうではなく、今後なされるべき検証の基礎資料を残しておくことに必要性を考え、2020東京大会に「現場で携わった」方に原稿を依頼し、現時点での東京2020大会の個別事例による検証をお願いした。特に今回は感染症が蔓延する中、真夏の大都市という過酷な条件の下で大会が開催された。